

## 批判精神を養うことは、より良い社会をつくる 不可欠な材料

県立伊勢崎清明高校 千明 俊太

### 「ゆとり世代」として生まれた私

私は、高校で地歴公民(日本史)を教えています。教職歴は6年です。現在は1年生の担任をしています。私の赴任校の生徒は、良く言えば真面目で協調性があり、落ち着いた雰囲気の日々過ごすことができますが、悪く言えば積極性がなく、元気がありません……。しかし、こんなフラットな環境だからこそできる教育実践もあるはず、と思いながら毎日を過ごしています。

まず、自己紹介の代わりに、私の教員としての方向性を決めた原体験を述べたいと思います。教職に就きたて(今でも就きたてたかもしれませんが…)の頃、「ゆとり世代は常識を知らない」「ゆとり世代は自ら動けない」という旨のことを先輩教員に言われました。この発言に強烈な違和感を覚えました。というのも、たとえば、私が「ゆとりコース」を選んで育ったならば、前記のような発言をされたとしても納得できます。しかし、生まれ育つ時代も国も私が選択してきたわけではありません。成長した時代の教育が「ゆとり教育」だったのです。そこを一括りにされて世代としてまとめられても…そもそも、その「ゆとり世代」を一端の「ゆとり成人」に育てた張本人があなた方なのでは？と、言い返したくなりました。「おれは絶対自分の発言や指導に責任を持ってない教員にはならん！」と心に火がついた記憶があります。「ゆとり世代」というコンプレックスを持った教員、それこそが私なのです。

### 今、思っていること

と、生意気なことを言っているものの、教職

に就いて6年が経ちますが、ふりかえってみると、右往左往した6年間だったと感じています。満足な指導ができた実感がありません。反省点ばかりが思い出されます。それでも、書経にある「教うるは学ぶの半ば」という言葉を頼りに、何とか教育に携わり続けています。様々な生徒たちに出会い、指導の失敗？を繰り返していくなかで、現任校に赴任してからは、「批判精神を持ってほしい」という思いを持って行動するようになりました。

### ようやく授業の話です

現在、私の受け持つ日本史の授業では、資料を読んで当時の状況を考えたり、年少の子どもに対し平易な言葉で歴史を説明するための文章作成をしたり…という、いわゆる「主体的・協働的で深い学びの実現(アクティブラーニング)」を目指す活動を少しずつ取り入れています。その中で、折に触れて「批判精神を養うことは、より良い社会をつくる不可欠な材料である」というシグナルを出し続けているつもりです。はっきり言葉で伝えたら負けだと思っているので(←なぜ?)、活動の中から感じてほしいと思っています。その実践のひとつを紹介します。

### 「国民精神総動員運動」を糸口に

「国民精神総動員運動」についての授業です。導入で、「最近、地域の結びつきが薄くなり、隣近所との交流も廃れつつある」という旨の文章を教員が紹介したうえで、「共同体意識や仲間意識はもっと強くしていくべきだ」「いや、その必要ない」の2択で生徒に選択させます。展開では、各自で2択のうち、選択した方の理由を個々で考えてグループ内で発表しあいます。「助け合

いは重要」「わざわざ隣近所と交流する意味ない」など、多様な意見が出ました。次に、「【共同体強化派】どうしたら共同体意識は強くできる？」

「【共同体否定派】どうしたら共同体意識をもっと弱くできる？」という問にそれぞれ取り組ませます。ここが、今回の授業で生徒に全力で考えてもらいたいところでした。結果は予想以上に面白い解答がありました(悲しくも授業内で発表しない生徒のほうがおもしろい解答をしていました)。「地域の活動には必ず参加させる【強化派】」「罰則を設ける【強化派】」「学校のクラスをなくしたらいいと思う【否定派】」「やりたい人だけでやる。強制は絶対しないという規則をつくる【否定派】」などです。この活動こそ、現状に対する批判精神を内包する問でした。この問をした後、戦中の「国民精神総動員運動」を紹介し、当時の国民に強制・推奨された具体的な活動のうち、やってもいいと思うものにチェックをつけ、各グループで共有します。ここでも「髪型の強制は絶対やだ!」「え?体力向上とかやりたいやつだけでやれよ!」「今の校則も似たようなもんじゃん!」など活発な意見交換がされていました。終結では、「共同体意識をどこまでもつべきか、個々で大きく意見が異なるなかで、どこでみんなが合意できるかを話し合っただけで決めていくことが民主主義だ」ということを私が話しました。ちなみに、授業の導入で挙げた「最近、地域の結びつきが…」は精働運動実践要目の解説文の一文です。戦前も現在も言っていることが変わっていません…。

この授業が何か生徒の意識をガラリと変えたかといえば、変えていないでしょう。しかし、「改善できる部分がある」「現状に不満がある」ということを歴史上の様々な事例から身近な事例にまで対象を広げ、考察していくことで、生徒の中で何か少しでもひっかかるものがあれば、と思いこのような授業を続けています。

## 主体的・協働的で深い学びの実現について

最後に、「主体的・協働的で深い学びの実現(いわゆるアクティブラーニング、以下、主体的な学び)」について触れます。現在盛んに勧められ

ていて、研修に行ってもこの話ばかりです。個人的には取り入れる価値は十分あると思います。生徒が主体的に活動して、それが学びの原動力になるならば、こんなに素晴らしいことはないと思います。しかし、取り入れた後どうなるのかは一抹の不安を覚えます。なぜなら、この学びを実践した先にある社会には、主体的な人間を許容する素地が熟成されていないと思う点が多いからです。懐古ばかりで思考停止の上役の存在や、忖度しなければ出世できない組織、ただ従うことだけが求められる会社…主体的に活動して成功するには、徹頭徹尾、個人として活動する他ない現状の日本社会。挙げればきりがありません。子どもたちに「主体的な学び」を求める前に、大人たちこそ、主体的に行動した者が良い思いをできる社会づくりに邁進しなければならないのではないのでしょうか。あのガンジーは「あなたがこの世で見たいと願う変化に、あなた自身がなりなさい」という言葉を残しています。このような考えに至ったのも、「ゆとり教育」を実施しながら、それを許容しない言葉を浴びた経験あつてのことです。何年か経ち、「やっぱり日本には詰込み型の講義授業の方が馴染むよね」なんてことにならないよう、やらされる「主体的な学び」ではなく、真の意味の「主体的な学び」を生徒自ら様々な場面でを行い、失敗と成功を味わえる、そしてそれを許容してあげられる教育現場をつくっていくことから始めたいと思います。

Be the change  
that you wish to see  
in the world  
Gandhi

